

ミドル・ジニア 自分流

加藤 仁

連載
155

「狭心症」の発病、手術、そして退職……
技術者が見つけたもうひとつの生き場所

五十三歳のとき心臓病を発病したことにより、サラリーマン人生が思わぬ方向へとむかつていった。

柿沢邦雄さん(昭和十三年生まれ)は、鮎釣りを趣味にして、休日ともなると那珂川に出かけては、友釣りのビビツとくる手応えをたのしんでいた。ある日「きた!」と思った瞬間、胸に痛みをおぼえ、息苦しくなる。その場で深呼吸をするが、異変がおさまるまでにしばらく時間を要した。

「嫌な予感がしましてね。早々に道具を片づけて帰ることにしました」

以後、通勤時に駅の階段をあがると、おなじような息苦しさに襲われる。それが度重なり、会社の診療所を訪れると《狭心症の疑いあり》とされ、自治医大病院で検査することになった。

結果、心臓壁にある三本の冠動脈のうち一本が九五割も狭まっていることが判明し、すぐさま「フーセン」と呼ばれる治

療をおこなう。風船をふくらませるようにして、血管の狭窄部を拡げる。医師の説明によると、再発の確率は「三〇割」ということであつた。

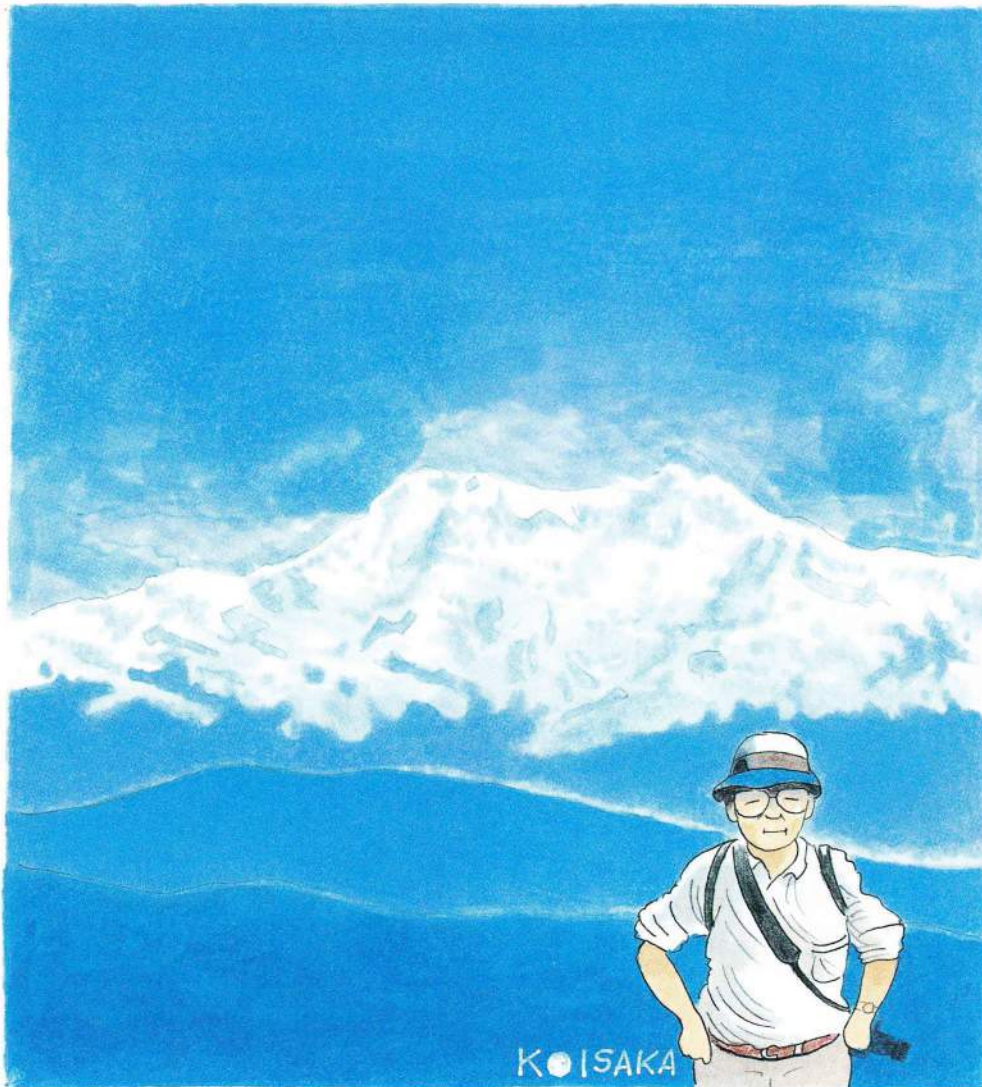
それにしてもなぜ、血管が詰まってしまい、「労作性狭心症」を患うことになったのか。

当時、柿沢さんは埼玉県吹上町にある富士電機の工場で「生産部長」をつとめ、連日来客の応対にあたっていた。

「技術者ですから、しゃべるのは得意じゃない。とりわけ納期にきびしい販売店の人たちが視察にくると緊張もします。そのころはまだ派手な接待をしておりますね。夜は一次会、二次会

……と飲むことになりました。翌朝はポツとしていて、昼ごろから調子が出てき

て、夜になるとまた接待をして飲むというありさまです」



イラスト・いさかつじ

2002.4.13



遺書と辞令

単身赴任ということもあって、酒量に拍車がかかった。「フーセン」治療をうけたあとも飲みつづけ、一年後には再入院をする。その後も入院を繰り返して、ついには三本の冠動脈が詰まり、バイパス手術をうけたのは発病から二年後、五十五歳の初夏のことである。

バイパスとなる血管は足から取った静脈を繋ぐなど、手術の危険率は「五割」であるという。家族・親族の代表が承諾書にサインをしてナースセンターに提出した。

「私にとって人生最大の事件です。手術そのものもそうですし、手術から半年後に会社を辞めるという意味においても」

柿沢さんは平成六年六月に手術をうけ、その年の十二月に退職している。辞めるにいたった理由は二つあったという。

ひとつは、手術の前日に遺書を書き、自身を冷静に見つめたことである。

「危険率五割ということで、遺書を書い

ておくのがいいと姉からうるさく言われましてね」

ベッドの上で妻に宛てた遺書を綴り、さらには家族や友人に手紙を書く。この過程で否応なくサラリーマン人生を振りかえり、人生における成就とはなにかと想いをめぐらせる。これまで収入を得る反対給付として、日々汲々とする自己犠牲を強いられてきた。手術が失敗であれば、それも運命と思うしかない。では無事、手術をおえて社会復帰を果たすということは、ふたたびこの生活にもどるということなのか。いや、それよりも自分ならではの個性を発揮できる人生をめざしたい……と。

「生きて還つたならば、べつの人生を歩きたいとつくづく思いました」

手術は六時間におよび、柿沢さんは生還した。

さらにひとつ、会社を辞めなくなった理由として、集中治療室から一般病棟へと移されたころ、異動の辞令をもらったことがあげられる。それによると社員八十名ほどの子会社(販売会社)へ移り、本部長として営業を統括する任にあたるという。

「肩書はものものしいのですが、私自身の意向も確認せず、しかもまだ入院中のときですからね。どうかと思いますよ」

昭和四十八年、栃木県大田原市の工場が操業して以来、柿沢さんと家族はその地に住みつけてきた。埼玉県吹上工場で生産部長をつとめた三年間は単身赴任をしたが、こ

こでまた東京都内にある販売会社に移るとなると、どうなってしまうのか。

それならば辞めさせてもらいますと、すぐには割りきれなかったらしい。退院した八月から、いったんは販売会社勤務に勤務している。ただし自宅から新幹線通勤をするようにしたのは、ささやかな異議申し立てであつたのか。毎朝六時に自宅を立ち、東北新幹線的那須塩原駅から上野駅へ、さらに山手線で池袋駅へ、そして埼京線で板橋駅へとむかつていた。

「こんなことをしていると、べつの人生をますます考えるようになりましたね。子ども三人も成人になったことだし、自己犠牲はもういいんじゃないか。そのとき五十五歳、あと五年で所詮、退職の身ですからね」

それまでの蓄え、退職金、早期退職の加算金を計算すると、定年までの五年間を乗りきれそうであつた。夫の闘病と落胆を知る妻は「あなたの考えどおりに。私はパートで働くから」と言ってくれた。子会社に移されて四ヵ月後、柿沢さんは辞表を提出している。

韓国からの誘い

辞めたあと、ボランティア活動を中心にすえた生活を描いていた。

「地元の大田原国際交流会に所属して、ネパールに学校をつくる計画に参画する。そのほか生産技術、製造技術、品質管理などの経験をいかして、中小企業を指導育成するなどのボランティアです」

その第一歩として、十二月二十日に退職すると、医師の承諾を得て正月には国

際交流会のメンバーとともにネパールを訪れている。

「山中で十日間ほどキャンプをしながら、いろんな職場から駆けつけた人たちと気持ちよくしゃべりました。会社を背負わないつきあいのたのしさを思い知らされたね」

ネパールから帰ると、国際電話がかかってくる。受話器のむこうから旧知の韓国企業の社長が語りかけてくる。

「柿沢さん、自宅にいるのなら、韓国にきて静養しませんか。ぜひ私の会社協力してください」

その社長は、柿沢さんが生産部長をつとめているとき、韓国中小企業の視察団の団長として吹上工場にやってきた。柿沢さんが工場内を案内し、食事の世話をすると、社長は感謝の言葉を流暢な日本語で述べる。帰国してからも礼状が届き、二人のあいだで文通がはじまった。柿沢さんがバイパス手術をうけたときも、わざわざ見舞いに訪れるなど、礼節を重んじる人物である。子会社に送りこまれたときも、進退を案じてくれた。

社長は柿沢さんの退職を知って、自社に迎えると申し出てくれた。これにたいして、柿沢さんはいくつか条件をつけた。

①病院で診療をうけ、薬をもらう必要がある。②実費(旅費、交通費、宿泊費、食費など)以外、給料は支給しないこと。③宿泊場所は工場に歩いていける場所にする。……等々。これら条件は呑まれ、毎月の半分を韓国に滞在するという、企業育成ボランティアの生活がはじまった。

(以下次号)